

# アピール

2011年3月11日の東日本大震災では、多くのてんかんのある人たちも被害を受けました。  
この震災を契機に、私たちは改めて身近な医療やくすりの情報を自らも管理することの大切さを学びました。

てんかんの治療にとって、服薬はとても大切で欠かすことのできないものです。

急に服薬をやめると「てんかん重積状態  
(普段の発作がどんなものであっても、全身けいれんがおこり、それが止まらなくなってしまう状態)」  
になる恐れがあります。この状態は、生命にも危機をもたらすもので、極めて危険です。

政府・自治体・緊急支援組織、そしてマスコミなどにも、抗てんかん薬の重要性が理解され、

この震災以降には緊急支援チームなどの常備薬品の中に

抗てんかん薬が加えられるようになりました。

さらに、かかりつけ医療機関や登録の薬局以外での

緊急的な処方も可能になりました。

こうした社会整備が進められる一方で、

てんかんのある人が避難先などで声を上げることができない、

という課題も浮き彫りになりました。

避難所では、地域で一緒に暮らす人たちの目を気にして、

てんかんがあることを伝えて適切な支援の継続を受けることをしなかつたり、

危険な自宅に閉じこもって避難すらしなかった人も、少なくありませんでした。

改めて、てんかんは誰もがかかるとのある脳神経の病気であって、その症状はさまざまです。

適切な医療を受けることで、その7割以上の方が、発作症状から解放されます。

皆さんは何も特別な技術は必要なく、いつもと同じ症状であるかななどを、

冷静に観察をしながら見守ってくれるだけで、私たちはどんなに心強いことでしょうか。

現在政府は、適切なてんかん診療がどこで暮らしていても身近で受けられるための体制整備事業を、

自治体とともに全国で進めています。

来年には、この取り組みに参加する都道府県は全体の半数を突破します。

今後どんな自然災害などが起きて社会が混乱しても、この東日本大震災の経験から得た教訓により、

てんかんのある人たちの命を守る環境整備が全国で進められます。

その上で、私たちは「てんかんがある」と安心して言える社会を望みます。

そして、私たちもてんかんを克服するために、

自らの経験をもとにこれからも社会に対して声を上げていくことをここに宣言します。

2021年10月23日

公益社団法人 日本てんかん協会

第48回全国大会(福島大会)

参加者一同